

若いお母さんたちへ

## 支えられての子育て

はるにれの会 佐野 恵子

我家は六人家族です。夫と私と、四人の子どもたちです。毎日、賑かに暮しております。現在、長男十歳、長女九歳、次男五歳、次女四歳です。よく人に、「四人いらっしゃるんですか。今どきめずらしいですね。」と言われます。私は、学生時代から、自分のこと、子どものことを考えるのが好きでしたから、四人位子どもを生み、自分の手で育てられたら楽しいだろうな……という単純な願望が、そのまま実現してしまったのです。それにしても、十年以上もの長い間、子育ての時期を過ぎてきて、

専業主婦の陥りがちな、閉塞的状况にもならず、学生時代からの感覚を持ち続けながら、安定した気持で、子育てができたことを、とても感謝しているのです。そうすることができたのは、やはり多くの人々に支えられてきたからだと思うのです。今日は、私の子育て時代を支えてくれた人々のことを書いてみたいと思います。

最初に思いうかぶのは、結婚前から行なっていた、ある地域の、知恵遅れの子たちと、その家族の人たちの、自主的に作った交流の場（めだかの学校）に、細々なり

とも、つながりを持っていたことでした。その会の、保育責任者として、週一回、第二子が生まれるまで参加していました。それでも、大きなお腹をして、一人をおんぶして通い始める頃から、責任者らしいことは、何もできずただ行って、お母様たちと雑談してくる…という日になってしまいました。それでも、私のことを「校長先生」とひやかし半分に言いながら、共に生きて行きますよ…という、いわば、運命共同体のようなものを持ってきていて、逆に、私が、励まされ続けていました。第二子が生まれて、転居しました。片道二時間もかかる所でしたので、めだかの学校も、月一回、日曜日の集まりとなりました。

当然、専門外の夫も引っぱり出されるようになり、親子四人で、遠出をするようになりました。と同時に、めだかの学校のお父様たちも参加されるようになり、ボランティアの人たち、スーパーバイザーの先生たちも含めて、いろいろな立場の人たちが友好を深める、楽しい場になっていったのです。第三子が生まれてからは身動き

できなくなり、年一回のキャンプ、クリスマス会、その他、不定期な集まりになりましたが、家族ぐるみのおつきあいは続いて行きました。我家の四人の子どもたちの成長を、楽しみにして下さる人たちに支えられて、子どもたちは大きな力を受けていると思うのです。また、私もこのような集まりに参加し続けることができ、とても幸せでした。

家庭に入っても、細々なりとも外との関係を持ち続け、何かしら役割を持つことは、とても大切なことだと思ふのです。そういう意味でも、『遊びを見つめる会』の主催者が、なかなか書けない私を見放さずに、励まして下さっていることにも深く感謝しているのです。更に、近所のお母様たちにも随分お世話になりました。上の子たちの幼稚園の送迎を、心よく引き受けて下さったり、外出の大好きな次男を、よく遊びにつれ出して下さったり、協力しましょう…という温かい雰囲気がありました。このように、私はとても恵まれた環境で子育てをしていたのですが、それでも私には、とても気持の重い

事がありました。

高校時代、高校の事務のおばさんが、私に一枚の写真を  
見せてくれました。それは、娘さんがお孫さんに授乳し  
ている写真でした。大きくて、豊かな、美しい乳房に、  
私は魅せられてしまったのです。私もこの写真のような  
お母さんにいつかになりたい…。そして、ミルクで育てて  
いる人を見ると、なんと怠慢な親だろう…と見下す、高  
慢な私にもなっていたことに気づかなかったのです。そ  
して、待ちに待った赤ちゃん。さあ、母乳で育てよう…  
と意気込んでいたのに、二五〇〇グラムの小さな赤ちゃ  
ん。元気もないので、母乳はだめ。母子同室の施設であ  
りながら、ほとんど新生児室で監視させられる…という  
ことになり、一生けん命お乳をしばっては、帰って来た  
時に授乳しようと必死でがんばっていたけれど、「そんな  
程度の量では、母乳だけで育てるのは無理ですよ。」と  
医者に言われてしまったのです。次第に、私自身がおか  
しくなってしまうと、人に会うと涙が止まらず、泣いて  
ばかり…という大変不幸なスタートを切ったのです。

私にとっては、全く予想外のことで、現実を受け入れる  
のに、随分苦勞しました。

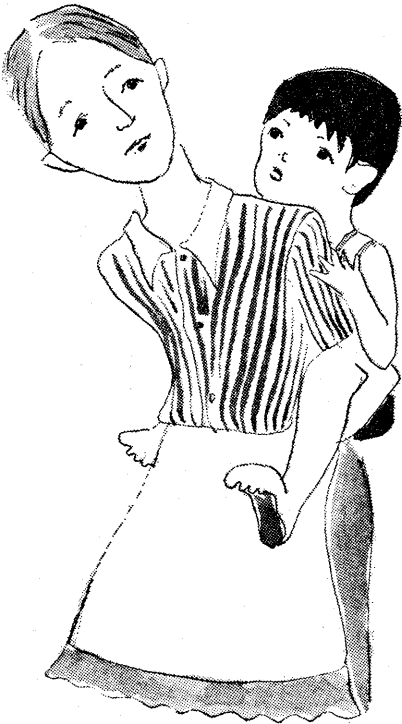
第二子は絶対に元気な子を…と挑戦し、念願かなって  
母乳でスタートしたのですが、三ヵ月程で限界。第三子  
は母乳にこだわらないでリラククスして…と心がけて、  
スタートは順調でも、二ヵ月半位で限界。あとは、混合  
になってしまうのです。母乳哺育に成功した人の話を聞  
いたり、本で読んだりして、次はこの事に注意して…と  
やってきたのに、ことごとく長続きしないで、早々にオ  
ッパイにさよならを言わねばならないことは、私にはと  
てもつらいことでした。そして、ついに少し前までの高  
慢な自分を反省しました。

更に、第四子の出産を真近にして、まだ、あきらめき  
れない私でした。実は、第三子が生後二ヵ月半位の時、  
ある月刊紙に、伊那保健所長で小児科医である小林美智  
子先生が、桶谷式母乳哺育のことを紹介していたので  
す。桶谷という助産婦さんの考え出した手技によって、  
多くの母親が、母乳に成功していること。また、食事の

とり方も含めた母乳管理が、従来の方法と違うことも知ったのです。しかし、桶谷さんは富山県の方。他の兄弟たちを残して、幼い子をつれての長旅は自信がなく、無理する程の事でもない…とあきらめてしまったのです。

第四子で同じ悲しみは味わいたくなく、また、自分の力ではどうすることもできないと悟ってしまったのですから、せっぱつまった思いで、予定日一週間前になって、その女医さんに手紙を書いたのです。「どんな遠く

でも、でかけて行く覚悟でいますから、どうぞよろしく。」と書き添えました。すると、数日後に、本当に間もなく返事の手紙が届いたのでした。それには、「必ず成功するので大丈夫。出産後に、近くの上手な手技者を紹介するので、安心してお産をするように。」との内容でした。うれしくて、感激の涙が溢れてきたことを、今でも忘れません。出産に関しては良い医者に恵まれなかったので、やっと本物の臨床家に出会えたよるこびも忘れら



れないことです。そして、生後一ヵ月程して、桶谷先生の第一の弟子ともいえる有能な若い手技者を我家に派遣して下さったのです。後で分かったのですが、とても多忙な方で、家にまで来て下さるのは、ごく例外的なことだったのです。私の必死な願いが通じたのでしょうか。小林先生は、私に、最善を尽して下さったのです。そして、手技をしていただいた結果、よく出るオッパイであること、生活を整え、食事を改善し、おいしい母乳にするために、手技を定期的に受けていけば絶対に大丈夫、と大鼓判を押してくれました。私は本当に安心しました。この時「私もやっと、一人前のおばあちゃんになれる。」と心の中で叫びました。大昔から伝わる母性の血が、トクトクと私の体の中に流れ始めたような気がしました。学生時代棟方志功さんの講演を聞いたことがあるのですが、「本当に心から願うことは、必ず実現できる。」という、印象深い言葉が、その時蘇り、本当の言葉だったことに思いを深くしたのです。更に、第三子の時、あの月刊紙に出会った頃お茶の水の主婦の友会館で、弟子

たちが開業し始めていたのを知り、一步踏み出していればその子から母乳哺育が可能だったことを知り、浅はかな判断で、無理だと決めつけてしまったことを深く反省したのです。更に最初の子から可能だったら、上の子たちに申し分けない気持ちでいっぱいになりましたが、もし、そうであつたら、年子で生まれて来ていた我が家では、今のような兄弟姉妹関係は生じていなかったわけです。やはり、与えられるべくして与えられためぐりあわせだったのだから、過去の事は、問うてはいけなと思います。しかし、良いと思えたことは、それがどんなに手の届かない遠い存在に見えても、無理だと決めつけないで、門を叩いてみると、意外にも道が開けていることを実感したのでした。私のこれからの良い教訓にしたいと思いました。

ところで、四人もいる中で、桶谷先生のおっしゃるように、昼夜三時間おき授乳はとてもきつく、また、一歳五ヵ月の違いの次男は外が大好きで、ちょっとした間に、外に出てしまうので、ゆっくり授乳できない旨を、小林

先生に訴えると、「母乳哺育を楽しみなさい。どんな優れた理論も、楽しまなければ意味がないんですよ。公園に皆でかけて行って、そこで子どもたちを遊ばせながら授乳すればいいんですよ。どこでも、気軽に、飲ませることがができる、そこが母乳の良いところなんですよ。」との答えが返ってきました。あまりに一生けん命になりすぎて、楽しむ余裕がなかったことを反省したのです。

その頃、長女の幼稚園のお迎えは、毎日の一仕事でした。降園後の三十分は、園庭で遊んで良いことになっていたので、子どもたちは大よろこび。次男もお姉さんたちと一緒に遊んで、遊びに興じているのです。それを園庭の隅で、末娘をおんぶしながら見ているのですが、時間が過ぎて帰ろうとしないし、先生も大目に見て下さるので、私も腰を据えて授乳。喜々として遊ぶ子どもたちを見ながらの授乳は、楽しいひとときでした。また、長男の学級懇談会などにも、気軽にでかけて行って、話しを伺いながら授乳……ということをよくしました。この頃、子どもたちが、繰り返しこんなことを言っていました

た。「最初に、お兄ちゃんがオッパイ飲んで、次がお姉ちゃん、その次があきちゃん、その次がまきちゃん、お母さんは、おばあちゃんのオッパイ飲んで、おばあちゃんは、ひいおばあちゃんのオッパイのんで、それから、ひいおばあちゃんは誰れのオッパイ飲んだの？」また、誰れのお腹から誰れが生まれたのか……その順番は……という問いかけが、特に上の二人の関心事でした。

こうして、私にとっては、大変忙しく、またとても充実した一年半が過ぎ、いよいよ断乳の日。たつぷりと、おいしい母乳を飲ませた後、両乳房に、へのへのもへじ、を書いておき、次に欲しがった時胸を開けて、この絵を見せるのです。断乳は方法、時期共にいろいろなり方があるのですが、これは別問題として、私もやってみました。いつものように、「バイッ」と言って、小さな手で私の胸を開けて飲もうとしましたので、思いきり大きく胸を開けて見せてあげました。本人がキョトンとしている中で、そこに居合わせた他の三人の子たちが、

一斉にその絵を見て、大笑いを始めたのです。「何これ？何なの？…」とゲラゲラお腹をかかえて笑っているのです。何がなんだかさっぱりわからないまま、末娘はしばらく不審そうな顔をしていましたが、ついに皆につられて笑い出し、最後は自分で私の胸の上にあった服をおろして、幕引きをしたのでした。それから数回、そのグロテスクな絵を見たりしましたが、決して欲しがりはしませんでした。母子共に、最愛のオッパイとの劇的なお別れを皆でゲラゲラ笑ってすませることができたことを、うれしく思いました。そして、上の三人の子たちも、同じように育てられたと頭の中では信じて育つでしょう。もし大人になって、本当のことがわかった時でも、最初のぎこちない育て方も、願いは同じであったことで許してくれらるうと思っっているのです。小林先生の登場は、子育てを無上に楽しいものにしてくれました。ぎこちない育て方といえは、最初の子はどうしても『私が育てる…』と意気込みやすく、二番目の時もこんな育て方で良いのだろうか、他の子と比較してこの程度

の育ち方で良いのだろうか…と心配する一方で、二人を人に預けて、何かやりたい…という母のみの欲求も押えきれないでいるのです。が、三番目の子が生まれたとたん、身動きできない自分を感じました。三人もの子どもが私を必要としている。それに専念することは大変意義のあることだと思えたのです。更に、三人が成長するにつれて、同じ親の子なのに、三人三様の違った個性を持っているのに気づかされ、その子なりに育ちゆく姿を素直に受け入れようという気持ちになりました。

私は、三人目でやっと母親になれた、と思っっているのです。今の時代、三人以上の子を持つのは、なかなか許されないことかもしれません。母性を素直に開かせにくい時代であるけれども、「私が、私の力で…」という負いを捨てて、もっと大きな力、より良く生きようとする人間本来の力を信じて、子育てをしたい、また、したいって欲しいと願うこの頃です。

最後に、人が育つ上で、自然の力もまた重要であることを忘れてはならないと思います。一本だけ空高く伸び

て咲く桜の古木を見て、「涙が出ちゃう!!」と感激する娘。夕暮れの散歩が大好きな子どもたち。夕暮れの空の色、程良い風に誘われて、気持も静かになるから不思議です。また、暖かな光が降り注ぐ午前中に、下の二人が我家の庭の真中にデンと作った少し大きめの砂場で、黙々と砂いじりをしている。話すことさえ忘れて、ひたすら無心に、砂に熱中している。その傍らで、私は洗濯物を干している。静かな時が流れている。ふと手を休め、まわりの山々を見上げると、大自然の中で、母と子と共に生かされているという思いに、深く頭を下げたくなる時があります。

多くの人に、自然に、支えられて、母も子も育つのだと思います。そういう育ち合いを大切にしたいと思いません。まだ子育て真最中ではありますが、何かと心配の種だった長男も自分らしさを発揮し始め、今、大きな山を一越えして、ちょっと休憩しつつ、越えてきた山を眺め味わっている、といった気持でいます。これからもまた山を越えねばならないだろうと思いますが、多くの人に

支えられていることを忘れずに、自分らしい歩みが続けていきたいと思えます。また、これから続く若いお母様たちを、少しでも支えてあげられる人になれるように努力していきたいと思っています。

